西南学院大学　国際文化論集　第31巻　第１号　19－71頁　2016年７月

宝が隠されている

── キリスト教学校に学ぶ，教える ──[1)]

塩　野　和　夫

はじめに

ある卒業生（伊東優子，1933年４月入学，1938年３月卒業）の活水女学校経験を手掛かりに，キリスト教学校に学ぶ意味，教える意味を考えたい。

彼女から繰り返し聞かせられた言葉がある。「活水女学校には宝が隠されています。それを探し出してください」[2)]。それは入学式の式辞でホワイト校長から新入生に語りかけられたメッセージだった。活水女学校在学中の５年間に伊東優子はかけがえのない経験をし，それらは人生を支える価値となる。そこで彼女は女学校における経験と価値のすべてを，入学式で校長から聞いた言葉「活水女学校には宝が隠されています」に託したのだった。

「活水女学校の宝」は伊東優子にとってかけがえのないものだった。そこで子どもたちにもぜひ「この宝に触れてほしい」と願い，1980年５月の活水学院東山手キャンパスへの旅行となる。卒業から40年余り後の子どもたちによる母校訪問にあたって，かつての同級生阿部清子さんが案内役を引き受けられる。

---

1) 本稿は 2015 年度活水学院「職員研修会」（2015 年 8 月 24 日，活水学院新戸町キャンパス）で行った 3 回の講演を論文としてまとめたものである。話題や口調に講演会の雰囲気を残している。なお，資料の提供や写真使用の許可を得るために活水女子大学の二瓶浄幸教授及び宗教センターに助力いただいた。活水学院からは『活水学院創立 125 周年記念写真集』から 6 枚の写真使用に対し許可をいただいた。

2) 参照，「卒業生の思い出」（活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』1980，「附録卒業生の思い出」51－52 頁）

集合写真（1936年）

キャンパスにおいて

彼女は門衛の許可を得た後に，キャンパスを丁寧に案内して下さった。

このようにして実現した東山手キャンパスへの旅行の本質は，親から子どもたちへと託されたかけがえのない価値の伝達にある。価値は文化を生み出すが，価値あるものの伝達は歴史的出来事の中核ともなる。歴史は人から人へと価値

あるものの継承によって形成されるからである。

そこで，本稿の第１の目的は活水学院の歴史において「大切にされてきたもの」への探求である。第２にそれは活水学院に連なる教職員が学生・生徒と共に営んでいる教育現場の中にある。したがって，第３に教育現場における日常生活が実は「活水学院の宝」と関わっていることに気づけば，それは生きる力となる。

なお，主要な分析方法として歴史学的な手法を用いる。

第１章　長崎の町の歴史的特色と活水女学校
― キリシタン・潜伏キリシタン時代をめぐって ―

第１節　なぜ，キリシタン・潜伏キリシタン時代の長崎か

活水女学校の創立は1879（明治12）年である。したがって，「なぜ，キリシタン・潜伏キリシタン時代の長崎か」という素直な疑問が生じる。1549年のフランシスコ・ザビエルによる日本布教開始から始まるカトリックのしかも女学校創立以前の歴史は，直接関係しないからである。

確かに活水女学校の歴史を学ぶ上で，キリシタン・潜伏キリシタン時代の長崎は一見関係がないように見える。ところで，歴史学の重要な概念の一つに「歴史的出来事における関係性」がある[3)]。この概念によると，活水女学校は長崎の町と密接な関係を持って立っている。だから，長崎を理解しないと女学校の歴史も適切には把握できない。

大学時代に長崎出身の友人から聞かされた忘れられない言葉がある。彼は指摘した。「長崎という町では，お寺のお坊様にしても，カトリックの神父にしても，プロテスタントの牧師にしても，本物でないと通用しない」。なぜ，長崎においては本物でないと通用しないのか。それは宗教にしても文化にしても教育にしても，キリシタン・潜伏キリシタン時代からの伝統が息づいているか

---

3) 歴史的出来事における関係性の概念については，以下を参照。塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』1995，123－128 頁

らである。本物に関する友人の指摘によると，長崎では内容の伴わないものは通用しない。しかし，本物であれば受け入れられる。

長崎の町の基底にはキリシタン・潜伏キリシタン時代の伝統が生きていて，現在も様々な分野で影響している。活水女学校も長崎に立つ以上，無意識のうちにもそれらと対応しながら教育事業を担ってきたに違いない。

だから，まず長崎の町の歴史的特色と活水女学校の関係を分析するのである。

第２節　「キリシタン復活」の奇跡に迫る

(1) キリシタン・潜伏キリシタン時代の概観[4)]

1865年３月に，浦上の潜伏キリシタンが落成したばかりの大浦天主堂で信仰を表明した。これを「信仰の復活」と呼び，奇跡とされている。なお，2015年は「信仰の復活」から150年目の記念の年にあたる。ところで，1614年に全国的な禁教令が出されてから250年余り，厳しい禁教政策は続いた。その時代を潜伏キリシタンはどのようにして信仰生活を続けたのか。概要を見ておきたい。

まず，布教の時代である。ザビエルが1549年に鹿児島へ上陸し，カトリックによる布教は始まった。彼らは上からの布教（封建領主：大村純忠・高山右近・大友宗麟など）と慈悲の組活動による民衆層への布教を行った。カトリックとの交流は領主に海外貿易による莫大な利潤をもたらした。他方，民衆はこれまでに味わったことのない人間的な経験をした。そのため，1600年当時には全国で50万人，長崎にも５万人の信徒がいたと推定されている。

しかし，封建領主によるイエズス会への土地寄進やカトリック国による侵略に対する疑いから禁教政策が始まる。長崎西坂における26名の殉教（1597），京都における52名の殉教（1619），西坂における55名の殉教（1622），濃尾崩れ（1644），大村藩崩れ（1654），豊後崩れ（1660），浦上一番崩れ（1790），天草崩れ（1804），浦上二番崩れ（1839），浦上三番崩れ（1856）が起こる。このような禁教下にあって領主層と武士層でキリシタンは壊滅した。民衆層の組織も各地で崩壊したが，明治期まで持続した地域もある[5)]。

---

4) 「キリシタン・潜伏キリシタン時代の概観」にあたっては，論文の末尾に掲載している資料１「年表　キリシタン・潜伏キリシタン時代の長崎」を参照。

(2) 慈悲の組とキリシタン学校の活動

領主層と武士層ではキリシタンが壊滅し，民衆層の組織も各地で崩壊した。そのように激しい迫害の時期を，なぜ生き残ることのできた潜伏キリシタンの地域があるのか。謎に迫るため，キリシタン時代の二つの活動を見ておきたい。慈悲の組（ミゼルコルディア）とキリシタン学校である。

海老沢有道は慈悲の組について，次のようにまとめている[6]。

> 慈悲の所作を実践するキリシタンの信心会。ミゼルコルヂヤの組ともいわれた。おそくとも1559（永禄２）年までに府内病院に奉仕するものとして組織され，その後，長崎，京都をはじめ各地に及んでいる。戦国下における医療，救籟，救貧，孤児・寡婦保護事業，また迫害下における禁固者，配流者，殉教者遺族の救援など多彩な活動のもつ意義はもちろん，布教第一線としての意義も極めて大きい。

慈悲の組はキリシタンの組織であり，「戦国下における医療，救籟，救貧，孤児・寡婦保護事業」，「また迫害下における禁固者，配流者，殉教者遺族の救援」を行った。社会的弱者に対するこのような救援活動は，近世日本ではほとんど見ることができない。したがって，地域社会で顧みられなくなった多くの人が彼らの活動によって救われた。そこで，慈悲の組の活動を介してキリスト教に触れ，入信する民衆が現れた。ところで，慈悲の組の活動は規則に基づく組織活動という特色を持つ。この特色は潜伏キリシタンの組織活動に通じる。

次いで，キリシタン学校[7]である。キリシタンの初等教育は教会で行われ，習字や教理・祈りを教え「全人教育を目的とした」。中等・高等教育に当たるセミナリヨでは，「キリシタンの教理，教会史，道徳，修養」だけでなく，「絵画，銅版画，印刷術，教会用具制作の工芸」も教えた。これらによって育てら

5) 参照，「近世封建制確立期のキリシタン群像」（塩野和夫『日本キリスト教史を読む』1997，37－41 頁）
6) 海老沢有道「慈悲の組」（『日本キリスト教歴史大事典』1988，622 頁）
7) 参照，H. チースリスク「キリシタン学校」（『日本キリスト教歴史大事典』407 頁）

れた南蛮文化は，各方面に様々な可能性を秘めていた。しかし，十分に発達する前に禁止される。ただし，長崎においては影響が残った。江戸時代を通じて長崎では，ヨーロッパ世界との文化的交流が続いたからである。

(3) 民衆の組織

慈悲の組と並ぶキリシタンの組織に信心会（コンフラリア）があった。長く続いた迫害の下でも，潜伏キリシタンが信仰を継承できたのは信心会の伝統に基く結束による。浦上山里村四郷の場合を見ておこう[8]。

> 二人は極秘裏に村人たちを説き廻り，ついに全村民を団結させるのに成功した。浦上には，キリシタンの地下組織ができた。まず帳方が一人いて，日繰（教会暦をいう）を所持していて，一年中の祝日や教会行事の日を繰り出し，また祈りや教義などを伝承する。浦上山里村五郷（馬込郷・里郷・中野郷・本原郷・家野郷）のうち，馬込郷以外の四郷がキリシタンであった。各郷に水方を一人置く。各字には聞役が一人いる。帳方は祝日や，祈り・教義を水方に伝え，水方は聞役に伝える。聞役が一戸一戸の信者を掌握していてそれを各人に流した。洗礼を授けるのは水方の役目になっていた。
>
> こうして帳方・水方・聞役という指導系統が出来上った。250年に及ぶ長い間，一人の神父もいないのに信者たちが信仰を伝え得た理由の一つはこの組織の故であった。外海地方・五島・平戸・生月地方のキリシタンたちもこれに似た組織をもっていた。

浦上では「帳方・水方・聞役」という組織があった。「帳方」は日繰を所持していて，「祝日や，祈り・教義」を各郷にいる水方に伝えた。水方は聞役に伝え，聞役は一戸一戸の信者に伝えた。洗礼は水方が授ける。このようにして，潜伏キリシタンは250年余り続いた厳しい禁教の時代に信仰を継承した。

外海・五島・平戸・生月にも浦上と似た組織があった。

---

8) 片岡弥吉「長崎の切支丹」（『切支丹風土記　九州編』1960，119－189 頁）

(4) 国際都市，長崎

明治期以降の長崎における教育界に影響を与えたのは，鎖国と呼ばれた時代における海外との交流である。このような事実は日本の都市ではきわめて珍しい。

江戸時代に海外との交流を認められていた４つの地域がある。対馬藩（朝鮮），薩摩藩（琉球），松前藩（アイヌ）と長崎（オランダ・中国）である。長崎における交流には２面性を指摘できる。オランダ（出島）や中国（唐人屋敷）との交流は，極めて限定的に実施された。これが一面である。それにもかかわらずもう一面指摘できるのは，長崎における蘭学の発展（たとえば，シーボルト）や中国文化の流入（崇福寺・興福寺，長崎くんちにおける蛇踊り）である。

これらが長崎を国際色豊かな都市とした。

第３節　長崎の歴史的特色とカトリック，そして活水女学校

(1) 歴史的出来事との対話

不思議な絵がある。ローマの外港チヴィタヴィッキア市の二十六聖殉教者教会に壁画として掲げられている長谷川路可「殉教への道」である。竹中正夫は長谷川路可と「殉教への道」について記している[9]。

> ローマの外港であるチヴィタヴェッキア市の二十六聖殉教者教会の壁画の製作は，彼（長谷川路可）の精魂を傾けた仕事である。もともとこの教会はフランシスコ会の修道士たちによって1872年に二十六聖殉教者を記念する教会としてたてられ，1950年に再建された。しかしその装いやデザインにおいて何ら二十六聖人を想起するものがないことに気づいた関係者は，そのころ日本カトリック美術協会会長として教皇謁見のためローマにやってきた長谷川路可に協力を依頼した。彼は日本における予定をすべて断わり，直ぐにチ

9) 竹中正夫『美と真実』2006，182－185 頁

ヴィタヴェッキアに赴き，1951年１月から壁画の製作に取り組んだ。日本に妻子を置いて，精魂を傾けて製作に当った。この間，足かけ４年，言葉もよく通じない教会の修道士たちと起居を共にし，質素な食事を分かちあい，ひたすら二十六人の殉教者たちの生涯を回想しては，足場によじ登って壁画を描き続けた。絵具が不足したり生活費に事欠くようなときには，ローマに赴いて日本人観光客のガイドをしてはまた製作に当った。長谷川は祈りつつ製作に当りながら神の生命の働きについて思いをめぐらしていた。

京都から刑場となる長崎西坂までの旅の途上で，官吏に引き立てられた少年がいた。これは400年前の出来事である。ところが，400年前の出来事を描く絵の左前方には手を合わせて祈る現代人がいる。400年の時と場所を隔てている両者，すなわち引き立てられる少年と祈る現代人を一枚に収める絵は何を語っているのか。それが歴史的出来事に対する対話である。ここに用いられている対話という手法は，類比や関係性と並ぶ歴史的事象の認識に関わる重要な方法である。「殉教の道」は対話を通して，現代人が400年前の出来事や人物を認識できることを示している。

したがって，長崎の町に立つカトリックおよび活水女学校の歩みは，この地域における歴史的出来事や特色との対話を通して読むことができる。

(2) カトリックと長崎の町

明治期の早い時期に，長崎市近郊では次々とカトリック教会が建てられた。坂井信生によると，次の通りである[10)]。

10) 参照，「明治期長崎市域およびその近郊のカトリック教会」（坂井信生『明治期長崎のキリスト教』2005，82－83 頁）

献堂式	教会名	所　在　地	現 所 在 地
1865	大浦	長崎居留地南山手	長崎市南山手町
1879	土井	西臼杵郡上村字下土井	(1)
1880	浦上	西臼杵郡上村字山里	長崎市本尾町
1880	大明寺	西臼杵郡大明寺村	長崎市伊王島大明寺
1881	神ノ島	西臼杵郡淵村神ノ島	長崎市神ノ島
1883	出津	西臼杵郡神浦村大浦出津	長崎市外海町出津郷
1920(2)	黒崎	西臼杵郡大字黒崎	長崎市外海町上黒崎郷
1887	三ツ山	西臼杵郡浦上村木場	長崎市三ツ山
1890	馬込	西臼杵郡深堀村馬込	長崎市伊王島沖ノ島
1891	竹松(3)	東臼杵郡竹松村字桜馬場	大村市植松
1892	高島	西臼杵郡高島村	長崎市高島町
1893	大野	西臼杵郡神浦村大字大野	長崎市外海町大字野神浦
1895	善長谷	西臼杵郡蚊焼村善長谷	長崎市天篭町善長谷
1896	香焼	西臼杵郡深堀村香焼	長崎市香焼町
1897	中町	長崎市西中町	長崎市中町

(1) 浦上教会に吸収される。
(2) 教会土地を1887年に購入し，1894年には計画を立てている。
(3) 現在の植松教会である。

教会設立には拠点主義を採用するカトリックが，長崎市周辺地域ではなぜこのように多くの会堂を建設したのか。その理由は明治期カトリックの重要な活動の一つであった潜伏キリシタンの発見と彼らのカトリック教会への回復に求められる。明治期長崎近郊における多くの教会建設にはこの活動の反映が認められるからである。長崎市および周辺地域での教会堂建設によって，多くの潜伏キリシタンがカトリック教会に立ち返った。したがって，長谷川路可「殉教への道」にあったように，彼らの間ではキリシタン・潜伏キリシタンとの対話が行われた。対話という手法は明治期の潜伏キリシタンがカトリック復帰に至る重要な手段であった。

浦上十字会（現，お告げのマリア修道会）は慈善活動を積極的に行った[11]。

11) 参照,「浦上十字会」（現，お告げのマリア修道会）（坂井信生，前掲書，90－93 頁）

1873（明治６）年，浦上信徒が総配流から帰郷し，日常生活面で塗炭の苦しみに喘ぎ，加えて赤痢，天然痘といった伝染病，台風の襲来に難渋していた折，大浦のド・ロたちはこれら信徒の救援活動を精力的に続けた。この活動を支援，協力し奉仕活動に身を捧げたのが，岡山鶴島の配流地から帰郷したばかりの岩永マキをはじめとする４名の若き女性信徒であった。……

マキたちが「浦上養育院」を開設したのは，かの女たちが女部屋で共同生活をはじめた年である。これは近代日本初の児童福祉施設ともいうことができる。ひとりの孤児を引き取ったのを手はじめに，多くの孤児，捨て子の養育に当ったのである。当時，浦上をはじめとする農村部の貧困は孤児，捨て子を生む土壌であり，また風紀の乱れから私生児が少なくなかったからだといわれる。

浦上十字会の活動はキリシタンが慈悲の組を組織して行った活動を彷彿とさせた。したがって，長崎の人々に共感を呼んだであろう。ここにも歴史的出来事との対話が認められる。

(3) 活水女学校と長崎

活水女学校の卒業生による対談をまとめた「学生時代のこと」[12]は，興味深い教育現場を再現している。

蓮　田　外国人の先生が多かったのでしょうか。

樋　口　いいえ，本流は日本人の先生で，外国人の先生はキリスト教学や日常会話，それに礼儀作法（マナー）を担当されました。

野々村　宣教師の先生がそれを教えられたのですね。

樋　口　はい。

---

12) 「学生時代のこと」（活水学院『創立 125 周年記念　たゆまざる－活水学院の歩みと環境－』2004，6－7 頁）

野々村　「マナー」という教科とか教科書のようなものはあったのでしょうか。

樋　口　黒板に書いていました。それは英語のヒヤリングにとても役立ちました。

廣　畑　宣教師の先生は，皆英語でされたのですね。

樋　口　英語です。日本語はほとんどお出来にならなかったようです。

廣　畑　実際的な英語教育だったのですね。

樋　口　そうですね。そしてバイブルクラスも。宗教学は英語でバイブルを説明され，楽しかったです。

授業で教えた宣教師は「日本語はほとんどお出来にならなかった」というのである。当時の女学生は宣教師の英語によって，「キリスト教学」「日常会話」「礼儀作法（マナー）」を教えられた。このような教育は国際都市の伝統を持つ長崎において本物と評価され，受け入れられたと推測できる。

活水女学校関係者の多くがかかわった活水女園[13)]は，次の通り報告されている。

経営は資金面でははなはだ困難であった。女史（ラッセル初代校長）は自らその重荷をおいながら，多数の人にも援助を訴えた。そして菅沼元之助氏とその夫人メリー女史は終始この事業を助けた。1907（明治40）年５月この女園は財団組織となり，その基礎も安定した。最初の理事はラッセル女史，ヤング女史，H. A. トーマス女史，菅沼元之助氏，木村シゲキ女史の５名であった。その目的は「無告の孤女および貧困の女児を救養，基督教主義に由りて教育し以て有用の婦人とならしむるにあり」であった。……

実際の指導は本校の卒業生が当った。女園の生活は毎朝礼拝を守り，讃美歌の稽古をし，それから鶏を飼い野菜を作り，庭にたくさんあった果樹の手

13) 参照，「活水女園」（活水学院百年史編集員会，前掲書，103－104 頁）

入れなどをした。技芸科の卒業生も刺繍を教え自立の道を講じていた。

こうして養育された女児で活水女学校に入学し宣教師宅に住み，働きつつ学び卒業して社会に出，あるいは本校専門部のほか看護学校等に学び盲・聾唖学校，幼稚園，施術所で奉仕する者もあった。

このような慈善活動は，慈悲の組の活動を無意識の層に記憶する長崎で共感され評価されたと考えられる。ここにも歴史との対話がある。

このようにして，活水女学校は長崎で認められ受けいれられて発展した。

第２章　人を育てるキリスト教教育 ― 活水女学校の祈り・継承・発展

はじめに ― ２つの視座

第２章では活水女学校の創立（1879年）から日本の敗戦（1945年）までを扱う。この時期を読み解くために主に２つの視座あるいは観点を用いる。

一つは日本キリスト教史に位置づけられた活水女学校という視座である。長崎の町に立つ活水女学校は，日本各地に設立されたキリスト教系学校の一つである。同じ時代に同じキリスト教の立場によって設立され，教育事業に従事した多くの女学校があった。そこで，日本各地に立てられたキリスト教学校の中に位置づける。その作業により活水女学校の独自性はかえって明らかになる。なおこの観点から，論文末尾の資料２に「年表　活水学院史（前半）― 創立より敗戦まで ― 」を準備した。

もう一つは活水女学校のキリスト教教育である。前半期に，活水女学校が力を注いだのはキリスト教教育である。そうであるならば，女学校においてどのようにしてキリスト教教育は取り組まれていたのか。初代校長ラッセル・第２代校長ヤング・第３校長ホワイトを中心に，前半期におけるキリスト教教育を読み解きたい。

ところで，キリスト教教育とは何であるのか。その基本的な性格を「私の教育論」[14]から押さえておく。

そのような中にあってキリスト教系学校の多くは教育そのものに夢を持っています。人を育てる事業に使命を感じています。……

ですから，「知恵」にしても「分別」にしても，それらは知識や技術そのものを意味するのではありません。むしろ，学校で学んで身につける知識や技術は，知恵や分別以前の事柄なのです。知恵や分別が課題になるのはそれからです。つまり，身に付けた知識や技術をどのように用いて生きるのか，どのように用いて社会に貢献するのか。ここで必要となる価値観や生き方，それらを真剣に考えるためになくてはならないのが知恵であり分別なのです。……

ここにキリスト教学校の重要な役割があります。キリスト教学校では知識や技術も大切ですが，それらを教育の最終目標とはしません。知識や技術に知恵と分別を加え，全人格的な人間を大きく育てることを目標とするからです。そのために人間を育てる教育への視点と情熱を持っているのがキリスト教学校です。

キリスト教学校には，「教育そのものに夢がある」。「それはキリスト教教育によって人を育てること」とある。キリスト教教育の本質が語られている。

第１節　ラッセルの祈り

(1) キリスト教学校の設立

1873（明治６）年２月にキリスト教禁制の高札が撤去され，キリスト教は黙認された。これをキリスト教伝道の好機と理解したプロテスタント・キリスト教は，伝道活動と並んで全国的に教育活動を展開する。資料３「キリスト教学校の設立」で取り上げた４教派には，日本聖公会・日本基督教会・日本組合基督教会と並んで日本メソジスト教会がある。

メソジスト派は明治期の早い時期に全国にキリスト教系学校を設立した。資

14) 「私の教育論」（塩野和夫『キリストにある真実を求めて ― 出会い・教会・人間像 ―』2015，26－40 頁）

料３によると，活水女学校はメソジスト派が４番目に設立した学校で，関東（東京・横浜）以外では最初である。しかも，1879年という設立年は高札が撤去された1873年からわずか６年後である。長崎に活水女学校が設立されて以降，同じ九州（鎮西学院・福岡女学院）や北海道（遺愛学院），東北（弘前学院），中国（広島女学院），中部（名古屋学院・静岡英和女学院・山梨英和学院），近畿（聖和大学・関西学院）でもメソジスト系学校が設立されている。

したがって，活水女学校は関東以外の地域でメスジスト系学校を設立するさきがけになった。

(2) ラッセル（Elisabeth Russell）

長崎に活水女学校を設立したラッセルとはどういう女性であったのか。活水学院『活水学院百年史』[15]から見ておきたい。

初代校長　E. ラッセル
『活水学院創立125周年記念写真集』より

まず指摘できるのは，ラッセルの強い勉学意欲である。良妻賢母が当然の価値観とされていた時代に，彼女は４歳から23歳でワシントン女学校を卒業するまでの19年間，学び続けている。その間いくつもの紆余曲折があり，安定した学習環境ではなかった。それにもかかわらず続けられた学習生活は，強い意志の結果である。卒業後の学習からも，彼女の意欲がうかがえる。

次いで職業である。19世紀アメリカにおける女性にとってほとんど唯一の職業は教師であった。ラッセルも教師を職業とする。しかしこれも安定した職業ではなく，いくつもの学校を転々としなければならなかった。それでも，彼女は教師を20年間続けた。もちろん，生活上の必要はあった。しかし，教育に対する強いこだわり，使命感が感じられる。

---

15) 活水学院百年史編集委員会，前掲書，19－20 頁

第３に，教師を続ける中で強い関心を持った海外宣教活動である。アメリカの海外伝道活動に関心を持ったラッセルは，アメリカ・メソジスト監督教会婦人海外伝道協会（WFMS）と関わりを持つ。40歳を越えた頃だと思われる。ラッセルの海外伝道への関心は，人生経験の少ない青年が憧れにも似た気持ちで抱いた幻ではない。順調なだけではなかった教師生活，それらの日々から知った生徒たちの様々な境遇，そこから体得した人生の機敏と悲哀，しかしだからこそ彼女は宣教師として神の召命に答えたのであろう。

要請に答えて宣教師として長崎に来た時，ラッセルは43歳であった。

(3) 祈りと活水女学校の発展

ラッセルが初代校長を務めた時期（1879－1897）に，活水女学校は特色を持った学校としての基礎を築いた。資料２「年表　活水学院史（前半）― 創立より敗戦まで ―」により，概観を押さえておく。

まず，学校を開設した1879年に生徒が１名であった事実である。なぜ，１名でも開設できたのか。将来への不安はなかったのか。開設に伴う様々な不安がなかったはずはない。それでも開設に踏み切れたのは，祈りにおける信頼であろう。生徒数に関しては２年目（1880年）に９名，３年目（1881年）に18名，４年目（1882年）には43名と増加している。それに対応して，時には先んじてキャンパスを整えている。すなわち1880年の南山手オルト邸への移転，1882年の東山手新校舎への移転，1895年の新校舎（カウエン館）の落成である。このように生徒数の増加に対応したキャンパスの整備からは，教育環境を適切に整えていくヴィジョンが見えてくる。

学校の組織も着実に整えられた。1881年に校名を「活水女学校」と定め，1887年には初等科・中学科・高等科・神学科・音楽科を設置し，活水女学校規則も制定している。1889年に規則を改定して美術科を置くと，1893年には予備科と裁縫科を設けている。このような発展も，学校の可能性に対する明確で柔軟なヴィジョンの結果である。これらのヴィジョンは，ラッセルの日ごとの祈りから生み出された。祈りには現実に柔軟に対応し新たな可能性を育てていく

力があるからである。

祈りによって創出されたものに，学生活動の場もある。ラッセルの祈りには，いつも学生が覚えられていた。1884年に蛍雪会と励志会を創設すると，1891年には学生による音楽会と作品展示会を催している。1892年に活水同窓会を創設し，1896年には機関紙『活水女学』を創刊，1897年に活水女園応援の音楽リサイタルを始めている。このような活動や交流の場を生み出したものも，活水女学校においては祈りであった。

活水女学校の創設期にはラッセルの祈りが女学校関係者の祈りを呼び起こし，特色ある基礎を築いた。

(4) 祈りと教育方針

ラッセルの祈りが活水女学校の特色を築いた具体的ないきさつを「教育方針」[16]から見ておきたい。「教育方針」は1883年４月に発表されている。したがって，開校から３年半ほど経った早い時期に明らかにされた指針である。

まず，教科内容について触れている。

> 已むを得ず土地の事情の要求に応ずる為めに私共で独自の計画をたてて之を実行して居るのであります。最初に実行した方法の大略は，国語に於いては大体日本の男子中学校で実施している教程に準拠し，英語にありては普通の米国の女学校の課程に従って教授して居ります。

際立った特色を示しているのが，困窮者への援助である。

> 斯くあらゆる階級の子女が入学することですから最初は生徒間に不和や諍が起こりはしないかと心配したのでありますが，最近のこと一人の乞食の児を収容しやうとしました時，生徒一同に「此憐れな女児を助けて学校に引受

16) 「教育方針（ラッセル）」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，19－20頁）

活水女園への贈物（活水幼稚園児，1915年ころ）
『活水学院創立125周年記念写真集』より

けませうか。どうしませうか。」と尋ねました処が，皆口を揃えて「入れてやって下さい」と答えて呉れました程で思ったやうな心配は少しもありませぬ。時々幼少のものが病気にでもなりますと年長の姉達が甲斐々々しく看護してやって居ることは数々です。其間に貴賤とか貧富とか更に区別はないのであります。

先に活水女園でも見たように，困窮者への援助はラッセルの一貫した姿勢である。「教育方針」は活水女学校の生徒にも受け入れられ，いわば学校の精神的雰囲気を形成している。

さらに，宗教的感化による活水女学校の様子を伝えている。

最後に申上げたいことは最近数ケ年に於て私共の働の極めて喜ばしい現れは生徒の間に宗教的感化が著しく盛になったことです。現在の処では私共は学校内に30余人の基督にある大家族を抱擁して居るのであります。

ラッセルは1898年に61歳で校長職を退いた後も，82歳（1919年３月）まで活水女学校に留まっている。この時に養女のメイ・ラッセルと帰米すると，1928年に92歳で召天している。

第２節　ヤングが指導した継承の道

(1) キリスト教教育を問われる

ヤングが校長に就任した翌年1899年に文部省訓令第12号が発令され，私立学校令も公布された。当時の状況を「私立学校令と活水女学校」[17]は描いている。

> 1899（明治32）年は，私立学校には苦しい年でした。「私立学校令」が公布され，制度は整ってきましたが，私立学校が次第に国家の統制の中に巻き込まれて行くことを意味していました。「私立学校令」は学校教育から宗教，特に基督教を排除しようという意図がありました。青山学院や明治学院では，廃校を真剣に議論したといいます。活水は種々折衝して許可は受けましたが，法令に従ったのでは建学の精神を貫くことが出来ず，ついに高等女学校とすることは断念し，活水女学校として「各種学校」に甘んじる決意をしたのです。しかし，そういうことも影響したのか，明治後半の活水女学校は特色ある学校であったようです。

学校教育における宗教活動を禁止した訓令第12号は，キリスト教学校に存立を問う法令となる。そのために全国のキリスト教学校は，キリスト教教育の継承か廃校あるいはキリスト教教育の放棄を巡って厳しい状況に追い込まれた。

当時の現実を如実に語っているのが，資料４「生徒，学生在籍者数調査表」である。資料４によりヤングが校長を務めた時代（明治31年度から大正９年度）を見ると，ほぼ200名代で低迷している。これはキリスト教学校の置かれていた状況の厳しさを反映している。

---

17) 「私立学校令と活水女学校」（活水学院，前掲書，31－32 頁）

(2) ヤング（Mariana Young）

活水女学校の困難な時期を指導したヤングとは，どのような人物であったのか。「略伝（ヤング女史）」[18]から見ておきたい。

ヤングは高等学校のラテン語科を卒業する（21歳）と，25歳でオハイオ・ウエスレアン大学に入学している。1893年に大学を卒業した時は29歳であった。このような高学歴は当時のアメリカでも珍しく，語学に対する造詣には深いものがあった。

第２代校長　M. ヤング
『活水学院創立125周年記念写真集』より

職歴も学歴と対応している。ヤングは小学校で教えただけでなく，中学部と高等学校ではラテン語・ギリシャ語・ドイツ語・英語を教えている。

1897年に宣教師として活水女学校へ派遣された時，彼女は33歳であった。

(3) キリスト教教育の継承

訓令第12号の発令と私立学校令の公布を受けて，活水女学校はどのように対応したのか。

「私立学校令と活水女学院」で見た通り，活水女学校はキリスト教教育を貫くために，「各種学校」という立場に置かれた。このことは学生にとって不利となる。活水女学校で学んでも，高等女学校卒業の資格を認めらなかったためである。このような現実は直ちに地域社会の評価や入学希望者数に影響した。

それにしても，それほど不利な状況に置かれても継承したキリスト教教育とは何なのか。ヤング時代に認められる特色の底流にキリスト教教育を認めることができる。

18) 参照，「略伝（ヤング女史）」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，58－59 頁）

(4) 生徒の自主性を重んじる校風

活水女学校は困難な状況においてかえって特色ある学校として育っていく。その１つに体育教育がある。

「新しい体育」[19]は新式体操を始めた頃の様子を伝えている。

ヤング女史は米国に在るとき，体育について興味をもって研究していたので，着任後長崎の教育のこの分野におけるおくれに着目して，組織的な新式体操を導入することをラッセル女史に語り，賛成を得てさっそく生徒に教えることになった。

しかし腹式呼吸法にしても，筋肉緊張運動（パーカッション）など考える人のない時代であったので，教えこむには苦労したようである。また運動服を着用させることにしたが，洋装になることを嫌って免除を願い出たものもあったと伝えられるが，女史の熱心な指導にしたがい，演技も３カ月程で立派に出来るようになった。棍棒，竹輪などを使う運動やスキッピング，花形運動，筋肉緊張運動などに至るまで，音楽に合わせていきいきと見事にできるようになったのである。

この新式体操の噂はすぐに全市の教育界の評判となり，各学校競って活水から学ばんとする程の勢になった。当時は講習会を開くこともなかったので，市民に公開してはという議が起った。そこで1902（明治35）年４月市内の婦人方の後援を得て，舞鶴座（現在，桜馬場町放射線影響調査研究所の隣にあった劇場）で実演を公開することになった。……

こういう学校体育は九州で初めてのことであったとアシュボー女史はその『英文50年史』の中で記し，WFMS も「ヤング女史は学校生活に新しい要素を加えた。それは体育文化の要素である。生徒たちの健康のよくなったことはこの体育のおかげである」とその意義を記録している。

---

19) 参照，「新しい体育」（活水学院百年史編集員会，前掲書，69－70 頁）

新式体操（1899・1900年頃）
『活水学院創立125周年記念写真集』より

「新しい体育」は長崎市で評判となったので，舞鶴座で新式体操を市民にも紹介した。さらに体育文化の意義が広く認められたと伝えている。教育を分類して知育・徳育・体育とされるが，体育は教育の基本の一部を構成している。「生徒の活動」[20]は生徒の自主性を尊重した活動を伝えている。すなわち，蛍雪会による英語劇の実演，励志会による邦語劇の実演，文学会による機関紙『活水女学』の発行である。

新しい体操や自主性を重んじた活動は，主体性を重んじる活水女学校の校風を育てた。ヤングは困難な状況における責任を全うすると，1920年３月に校長を辞任した。1932年に68歳で召天している。

20) 参照，「生徒の活動」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，84－86 頁）

第３節　活水女学校発展の内実

(1) せめぎあった二つの力

ホワイトが校長を務めた（1920－1939）のは，どのような時期であったのか。資料２「年表　活水学院史（前半）― 創立より敗戦まで ―」の右側に記されている「日本のキリスト教史」欄を見ると，近代化の過程で二つの力がせめぎあっていたことが分かる。

一つは世界の課題を共有して解決し（1920：国際連盟の設立，1922：ワシントン条約に調印），国内的にも国民の権利を守ろうとした力（1920：最初のメーデー，1922：水平社の創立，1925：普通選挙法の公布）である。このような状況にあって，キリスト教も積極的に発言した（1920：教会同盟の宣言，1928：社会信条の制定，1930：神社問題に関する進言）。

他方，国家権力による統制強化を進めようとした力（1921：大本教幹部の検挙，1925：治安維持法の公布，1929：共産党員の検挙）がある。その影響力が強くなる中で，国際的に孤立し（1933：国際連盟を脱退），軍国主義体制へ進んでいった（1932：上智大学配属教練教官の引き揚げ，1936：二．二六事件の勃発，1937：日中戦争が始まる，1941：太平洋戦争が始まる）。

ところで，資料４「生徒・学生在籍者数調査調」によると，この時期の学生・生徒数はホワイト校長指導の下，200名代から600名代へと順調に推移している。ホワイトとはどのような教育者であったのか。

(2) ホワイト（Anna L. White）

「略伝（ホワイト女史）」[21]によると，ホワイトは1902年９月に18歳でシカゴ大学に入学した。成績優秀のために，彼女は学則により卒業する３か月前に卒業証書を受け取っている。1907年からダコタ・ウエスレアン大学で数学を教え，1909年には教授に昇進している。これらの学歴と教歴からホワイトは若くして優秀で，数学に関心を持っていたことが分かる。

---

21) 参照，「略伝（ホワイト女史）」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，114－115 頁）

その後，シカゴ大学における研究とシカゴ・ウエスレアン大学での教授を経て，1911年にWFMSより日本へ派遣されている。優秀なだけではなく，20歳代後半にはキリスト教の海外宣教活動に強い関心を寄せていた。

青山女学校の教師とコロンビア大学での研究を経て，ホワイトは1920年に活水女学校の第３代校長に就任する。35歳であった。

第３代校長　A. L. ホワイト
『活水学院創立125周年記念写真集』より

(3) ホワイトの教育方針

1935年４月の入学式でホワイト校長は「活水女学校には宝が隠されています。それを探し出してください」と語りかけ，伊東優子をはじめとした新入生の心をとらえている。彼女はどのような教育者であったのか。ホワイトの「教育方針」[22]を見ておきたい。

来日した時，東京で初めて梅の花を見られた。古枝に咲いた２，３輪の薄紅の花であったが，そこに婦人の「かくれた力」と「静かな美」を見出し，梅花に日本婦人の象徴を見たのである。この力と美とを，1926（大正15）年に竣工した本校の新しい校舎にも見出した。それは「人格の基礎として生きた宗教という鉄筋を組み，克己や努力というコンクリートを詰め，その上に優雅な花を咲かせた」姿であるといわれる。活水は女史にとっては，自分の教育理念にふさわしい場であった。

この教育理念実現のためには，まず男子と均等の教育の機会が与えられねばならない。「将来母たるべき人が男子と同一の機会が与えられる日が来れば日本のためどんなにか喜ばしいことでせう」といわれる。しかしこれは男子と同一の教育を求めることではない。「英語ならば婦人の立場から面白い

22) 「教育方針」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，115－117頁）

と思う程のものを読みうれば不足はなく，化学ならば食品の分野で，物理ならば家庭内の問題を，解き得る程度で充分である」と，まことにつつましい考え方である。しかしこれは男子よりも劣るということではなく，国立の大学でも女子に門戸を開き，そこに学び女子が成績をあげているように，ここ活水においても真の力を養いつつ「優美を目標として婦人の教育を進めませう」という。

次に教育者としての指導と校長としての管理行政の仕方について，交友会誌『香柏』５号には，着任後間もない女史から受ける印象について職員と思われる人の伝える言葉がある。その要点を述べると生徒指導に当っては一時に一事をという方針をとり，一つの問題について多岐にわたる注意を与えることを避け……教室を初め環境をよく整理し，清潔を保ち，事に当っては敬虔な短い祈りを以て始め，理性を持った愛の実行家となるように指導した。

校長としての統率と事務的管理はデモクラシーの原則に立ち，職員会は報告会に終らなかった。活水の改革については，学校の弱点を謙虚に認め，それを喜んで補いたいとする進歩主義の立場であった。管理についてはその理性的明快さが，個人や組織に円滑な活動性を与え，学校は内外にわたって整頓されていった。そうして早くも「活水に曙光が見えた」という印象を与えた。教えを受けた卒業生はこう伝える。

いたずらに規則を設けてその型にはめず，徐々にではあるが実行の能力を養われた。事に臨んで自ら判断し自由意志によって選び，進んで責任を以て事に当らしめられた。しかし一方においては先生自ら率先して事を行い先頭に立って範を示された。宗教の指導に当っては，進歩的で合理的信仰に立って，天父に仕える人を導こうとしたが無理に引き入れて信者の数がふえるのを願うのではなく，生涯変ることのない信者となることを望んでいた。それで生徒たちは極めて自由な立場にあったが，先生の神に対する姿勢と人格の真実さは生徒全体の畏敬のまとであった。

「教育方針」は，ホワイトが全人格的存在である生徒に対する教育の役割りを構造的に理解していたことを示している。すなわち，「人格の基礎しての宗教という鉄筋」，「克己や努力というコンクリート」，「その上に咲く優雅な花」という構造である。その上で，女性に対する「まず男子と均等の教育の機会」の必要という主張がある。さらに，生徒指導にあたっては「一時に一事という方針」という立場を採った。校長の立場については，「統率と事務的管理はデモクラシーの原則」を重んじた方針で学内の意見に耳を傾けた。

このようにして，生徒から「いたずらに規則を設けてその型にはめず，徐々にではあるが実行の能力を養われた」と評価されている。

(4) 継承と発展

「活水女子専門学校職員（大正12年５月末調）」と「活水女学校職員（大正12年９月調）」[23]は，活水女学校の教育現場に関して興味深い事実を語っている。1923年当時，活水女子専門学校の教師１名（英語：徳永ヨシ）と活水女学校の教師８名（聖書：高森万寿，音楽：戸次アヤ，英語：徳永ヨシ，英語：高森ふの，音楽：小田キヨ，英語：江藤ジノ，音楽：内村フク，英語：渋谷イヨノ）が活水の卒業生であった。これは何を意味するのか。

「私の教育論」によると，「キリスト教教育の現場ではそれを担っている教員が自らの夢や使命を学生に託します。託された学生はいつの日かその精神性をいろいろな場でそれぞれの仕方で担うことになります。だから，キリスト教教育の精神性は歴史を貫いて生き続けるのです」。

これが事実だとすると，活水で学び活水で教えた教師を中心として「活水女学校におけるキリスト教教育の精神性」は継承されている。しかも，その時期に活水女学校は着実な発展を遂げていた。したがって，「この時期の発展はキリスト教教育の継承を内実とした発展であった」と言える。

---

23) 「教育組織」（活水学院百年史編集委員会，前掲書，131－133 頁）

第３章　活水学院の宝 ― 平和・個性・生命 ―

はじめに ― １つの方法と１つの記憶 ―

敗戦から現在までの活水学院を読み解くために，１つの方法を用いる。それとは別に一つの記憶についても考えておきたい。

１つの方法とは，活水学院の歩みと西南学院との年表による比較である。同じ時代を生きたキリスト教学校として，両校には共通性がある。それにもかかわらず，それぞれに固有の歴史や地域社会からの要請，さらに学校の規模から生じた違いも認められる。これらの相違から活水学院の個性を見い出すことができる。なお，両校の歩みを比較するために，資料５「年表　活水学院史（後半）― 敗戦より現在まで ― 」を作成した。

１つの記憶とは長崎市への原子爆弾の投下（1945年８月９日）である。一瞬にして多くの人の命を奪いあらゆる営みを虚無と化したあの残虐な出来事は，活水学院にとって何であったのか。この考察を進めるために，説教「使命を生きる」[24]を用いる。

第１節　平和の礎となる教育を願って

(1) 被爆経験を想起する

被爆とは活水学院にとって何であったのか。それは教育現場でどのように想起されてきたのか。まず，『活水学院　創立125周年記念写真集』に掲載されている被爆関連記事を取り上げる。以下の通りである。

１　1945年８月９日，原爆投下の日，本校では可燃物を疎開し，屋外に搬出する作業を行っていた。爆風によって校舎の屋根は浮き上がり，すべての窓硝子が破れ，扉，窓枠もゆがみ，校舎内部のものも散乱する状況で，多数の

24) 「使命を生きる」は 2001 年 8 月 9 日に鎮西学院で行われた「2001 年度平和記念礼拝」における説教である。参照，「使命を生きる」（塩野和夫『継承されるキリスト教教育 ― 西南学院創立百周年に寄せて ― 』2014 年，277－282 頁）

負傷者も出て混乱に陥った。また，学徒動員で工場にいた者や，爆心地近くの生徒家族等関係者にもその被害は多く及んだ。……

本校では，９月15日に被爆犠牲者の追悼記念式が行われたが，物故者は教員９人を含め，89人の多数にのぼった。　写真６枚。（12－13頁）

２　1945年８月９日に投下された原子爆弾による活水学院関係の死亡者は，教職員，生徒，同窓生合わせて150余人である。被爆50年目の1995年５月27日に，「被爆50周年追悼記念式」が，活水学院と同窓会の共催で挙行された。式場の大講堂には全国から多くの関係者が集い，御霊の平安と世界平和を祈念した。……

なお，中学・高校では毎年８月９日を登校日とし，「祈念礼拝」及び「集会」を実施している。　式次第と関係写真２枚（55頁）

３　被爆遺構の清掃奉仕活動（石碑守（いしぶみもり））も，各方面から注目されている。写真１枚（74頁）

４　1998年８月18日　第１回高校生平和大使　石丸あゆみ（～23）（96頁）

(2) 教育は無力なのか（参照，資料22－１）

説教「使命を生きる」は，被爆を経験した長崎における教育活動に対する根本的な問いから考察を始めている。

そうだとすると，原子爆弾という恐ろしい力の前に教育は無力なのでしょうか。どんなに誠実に人を育て，そのための教育を行っても，恐ろしい力の前には一人ひとりの力は何の役にも立たないのでしょうか。

重い問いである。活水学院の教育現場からこの問いに向けて答えることのできる一つは，「想起」という行為である。活水学院は折々にあの出来事を想起

してきた。ところで，「想起する」行為の中には「追体験」が含まれる。つまり1945年８月９日の悲惨な出来事は，1945年９月15日の「追悼記念式」や1995年５月27日の「被爆50周年追悼記念式」で想起され，参加者に追体験されている。その時に参加者は「恐ろしい力の前に活水学院の教育は無力なのか」という問いの前に立たされていた。

(3) 不思議な平安

ここで，説教「使命を生きる」からその一部を見ておきたい。なお，伊東平次は活水学院の関係者でもある。彼は，第２代校長ヤング先生追悼式（1932年10月28日）で市内教役者代表として弔辞を述べている[25)]。

長崎市に原子爆弾が投下された前日，８月８日にソ連軍がかつて日本の支配していた中国東北部に一斉に進撃を始めました。日本軍はなすすべもありません。広大な満州国はたちまちにソ連軍の支配下に置かれました。東北部にハルピンという大きな町があります。この町にその頃，日本メソジストハルピン教会がありました。牧師は伊東平次といって，鎮西学院の出身者です。伊東牧師の説教を直接聞いたことはありません。しかし，テープで聞きました。そのなかで印象的な説教が，ソ連軍の支配下に置かれた時のハルピン教会を語ったものです。

日本軍は戦いに敗れ，町はソ連軍の支配下にありました。町に残された日本人は本当に不安な日々を過ごしていました。そんな状況にあって伊東牧師は黙々と日曜日には礼拝を行い，平日には会員宅を訪ねて慰めを語っていました。ある土曜日の午後でした。ソ連軍が教会に来て，「明日，教会堂をソ連軍に引き渡すように」と告げていきます。伊東牧師が「明日は日曜日で礼拝がある。礼拝を終えてから引き渡したい」と希望を申し出たところ，それが認められます。

25) 参照，活水学院百年史編集委員会，前掲書，171 頁

そこで伊東牧師は服装を正し，胸ポケットに聖書を入れ，夜の町へ出かけて行ったのです。ハルピンの町には夜間外出禁止令が出ていました。ですから，見つかると射殺されても仕方ありません。万一射殺された時に，自分が何者であるかを示すために，伊東牧師は胸ポケットに聖書を入れていたのです。彼があえて夜間外出禁止の町へ出かけて行ったのは，「明日の日曜日に行う礼拝が最後になる」ことを知らせるためでした。ハルピンの教会役員の家を一軒一軒訪ねて，「明日の礼拝が最後になる。だから，ぜひ礼拝に出席してほしい」と伝えて回ったのでした。

その時の心境を伊東牧師は説教で，このように語っていました。

> 不思議と心のなかは平安でした。危険なのです。射殺されるかもしれない。しかし，服装を正し，聖書を胸ポケットに入れて歩いた時，心は不思議と平安でした。

射殺されるかもしれない夜の街を歩いた時，伊東牧師の心に宿った平安とは何なのか。それは活水学院に対して何を意味するのか。

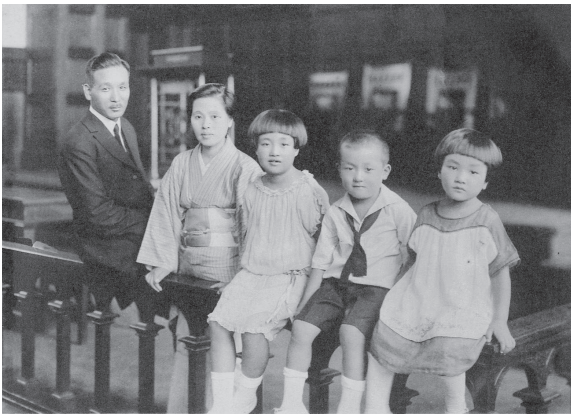
(4) 活水学院の使命

引き続き，説教「使命を生きる」からの引用です。

あえて夜間外出禁止の町へ出かけて行った伊東平次牧師，その生き方と生涯から三つのメッセージを聞きたいと思います。

第１は，伊東牧師が鎮西学院中学部の出身者である事実です。彼は当時の町名でいうと，佐賀県の東与賀村に生まれます。そして，長崎市にあった鎮西学院で学びました。その時に出会った宣教師から，伊東は文字通り生涯を変えられます。宣教師から受けた人格的な影響によってキリスト教徒になっただけでなく，牧師として生涯働くことになるからです。

伊東が働いた教会とその期間を紹介しましょう。



神戸栄光教会における伊東平次とその家族（1925年）

石川県の七尾教会（1916－1920）
韓国の仁川教会（1920－1922）
神戸市の神戸栄光教会（1925－1926）
沖縄県の那覇教会（1926－1931）
長崎県の飽之浦教会（1931－1937）
中国東北部のハルピン教会（1937－1945）
諫早市の諫早教会（1953－1956）
東京都の八丈島中之郷伝道所（1956－1972）

「どういう卒業生を出したかで学校は分かる」といいます。伊東平次は牧師らしい牧師でした。そういう牧師を生み出す教育力が鎮西学院にはありました。若い皆さんにも，鎮西学院から人生の大切な真実をしっかりと学び取ってほしいと願います。

第２に学びたいことは，「なぜ，伊東牧師が夜間外出禁止の町へ出かけて行ったのか」，その理由に関係しています。彼が出かけて行った理由は目的から分かります。伊東牧師は夜の町を歩いて，教会役員の家を一軒一軒訪ねました。そして，「最後となる明日の礼拝に出席するように！」と促して

回ったのです。つまり礼拝です。日曜日の礼拝は伊東牧師にとって，あえて夜間外出禁止の町へ出かけていくほど大切なものでした。そこに彼の使命があったからです。

皆さん，皆さん一人ひとりには必ず担うべき使命があります。人には皆，自分が担うべき使命があるからです。その使命に出会い，使命を担って生きる時，人は本当に生きることができます。しかも，使命を担って生きるなかでかけがえのないものが生まれてきます。それは何物にも代えることのできない大切なものであり，暴力で破壊されてはならない宝物です。

第３に学びたいこと，それは平和に関係します。伊東牧師は夜間外出禁止の町へ出かけて行った時の心境をこのように語っていました。

不思議と心のなかは平安でした。

一つ間違えれば，殺されるかもしれないのです。そんな時に，なぜ心に平安があったのでしょう。ここに大切な真理があります。「人は皆，担うべき使命がある」と言いました。さらに言うと，「担うべき使命」に誠実に取り組んでいると，そこには深い平安が伴うものなのです。なぜなら，そのような人の魂に神から送られてくる「シャローム（平安）」が宿るからです。

イエスは言われました。

平和を実現する人々は，幸いである。（マタイ福音書第５章９節）

「平和を実現する人々」とは誰のことでしょうか。それは平和運動の活動家だけではありません。家庭であっても学校であっても，その人に与えられた使命に誠実に打ち込んでいる人，暴力によって壊されてはならない大切なものを心を込めて育てている人，その人たちはまさに平和を実現する人々です。そのような人々は，日々の生活と仕事を通して平和を作り出しているのです。

活水学院には使命がある。長崎の町に立ち，被爆経験を想起する教育機関に課せられた使命である。それは日常の教育活動を通して人を育てる時に，「それが暴力によって壊されてはならない大切なものである」という強い自覚から生じる。この自覚によって活水学院は平和の礎となる教育を施す場となる。

第２節　活水学院の教育システム[26)]

現在に至る活水学院の動向と西南学院との比較によって，活水学院における教育システムの特色を考えたい。便宜上，３時期に区分して行う。

(1) 再生期（1945－60）

再生期に共通することとして，いずれも新学制に伴う中学校（活水：1947，西南：1947）と高等学校（活水：1948，西南：1948）を開設している。

その上で，活水学院は女子短期大学に３学科（英文科・家政科・音楽科）を設けている（1950)。西南学院では大学文芸学部に神学・英文学・商学の３コースを設けている（1954)。1960年に西南学院は安保反対運動で３日間のストライキを行った。

(2) 短期大学の充実期（1961－80）

充実期に共通するのは，学部学科の新設である。

活水学院では短期大学家政科に家政と食物の２専攻を，音楽科に器楽と声楽の２専攻を新設する（1967)。次いで，家政専攻に被服・食物・家庭経営の３選択を設ける（1969)。さらに，短大に日本文学科を新設し（1977)，高校に音楽コースを新設している（1977)。

西南学院では大学に新たな学部学科を新設している（1967・1969・1970・1974・1975)。また，大学院を設置する（1970）と，次々と新しい課程を設けている（1972・1974・1980)。充実期には学生運動も盛んで，ストライキや封鎖が頻発した。

---

26) 参照，資料５「年表　活水学院史（後半）－敗戦より現在－」

(3) 大学への移行期（1981－現在）

移行期に共通しているのは，学生の課外活動への支援が充実したことである。

活水学院は女子大学（文学部英文学科・日本文学科）を開設する（1981）と，音楽学部（1994）・健康生活学部（2002）・看護学部（2009）を新設している。1991年には大学院（文学研究科英文学専攻修士課程）を開設する。高校には英語科を新設している（2003)。国際交流センターを開設する（1981）と，1984年に春期海外語学研修会を始めている。1985年には就職課と国際交流課を設置する。1991年から順次，海外の諸大学との交流協定に調印している。活水国際人教養講座（1993）や活水市民講座（1996）も始めている。

西南学院では1994年に高校が男女共学に移行すると，中学も男女共学に移行している（1996)。この時期に大学院が充実し，2004年には法科大学院が設けられる。小学校を新設したのは2010年である。地域社会を意識したコミュニティセンター（2007）や子どもプラザ（2007）が開設される。さらにボランティアセンターも設けられている（2012)。

(4) 活水学院の個性

活水学院の教育システムを西南学院と比較する上で注意を要するのは，規模の問題である。学生数すなわち予算面で，西南学院は活水学院の約３倍ある。この事実は西南学院に教育活動の可能性を広げている。逆に活水学院の立場からすると与えられた予算を最大限有効に用いる道を探すこととなる。その結果，活水学院の個性が教育システムからも読み取れるようになっている。そうだとすれば，活水学院の個性とは何なのか。

活水学院の個性は第１に，「キリスト教精神による全人教育」に取り組み続けてきた事実[27]にある。西南学院大学は，諸般の事情により1991年度よりそれまで４年間必須であったキリスト教学を２年生までとした。チャペルに関しても，大学では全員の参加を求めていない。それに対して，活水女子大学は現在

27) 参照，「キリスト教精神による全人教育」（活水学院『2015　大学案内』4－5 頁）

もキリスト教教育を重視して４年間のキリスト教学を必須とし，週１回のチャペル出席を全学生に求めている。

活水学院の個性は第２に，大学教育システムの専門性に認められる。いずれの学部（文学部・健康生活学部・音楽学部・看護学部）も，多くの学生を対象にすることはできない。むしろ少数の学生を指導して育てあげ，専門性を獲得させている。ここに顕著な特質を見ることができる。

第３の個性は，女性の視座である。文学部現代日本文化学科が「新しい女性像」とこの点を明記している[28]が，この特色はいずれの学部学科に関しても指摘できる。

第４の個性は，社会における少数者，弱い立場に置かれた者たちへの配慮である。このことは特に看護学部に認められる。

第３節　伝統に宿る生命

(1) 活水学院の伝統

戦争末期における活水学院の現実を伝える文章がある[29]。

> この結果1944年２月７日専門学校は認可され，高等女学校の認可はおくれて２月15日であった。こうして19年度の４月から新制度による専門学校（外国語学科，音楽科，保健科，被服科）と４年制高等女学校が発足した。しかし，キリスト教主義によって教育の達成をはかるという本校本来の立場は消えてしまった。

認可を得るために，「キリスト教主義教育」の文字は消えてしまった。しかし，教育現場はどうであったか。

---

28) 参照，「文学部　現代日本文化学科」（活水学院，前掲書，16 頁）
29) 活水学院百年史編集委員会，前掲書，219－220 頁

このように戦時下でも教科外の活動として毎日礼拝は守られ，修養会，組会，卒業礼拝も持たれていた[30]。

活水学院は認可を得るために，申請書から「キリスト教主義」の言葉を削除せざるを得なかった。そうであるのに，なぜ教育現場では毎日の礼拝・修養会・組会・卒業礼拝と一連のキリスト教教育を維持し続けていたのか。ここに認められるのが，活水学院の伝統である。

初代校長ラッセルによって基礎を築かれ，第２代校長ヤングによって継承され，第３代校長ホワイトによって発展させられた活水女学校の底流には，何よりも大切なものとしてキリスト教による諸行事がある。だから，キリスト教教育は消し去ることのできない活水女学校の伝統となった。そのためにたとえ申請書からキリスト教主義の文言は消えても，教育現場ではどこまでもキリスト教教育が実施されていた。

(2) 伝統と個性

歴史的存在は歴史的出来事の総体と見ることができる。この見方によると，活水学院には百年を越える歴史的経験が蓄積されている。しかも，歴史において大切にされてきたものは活水学院の重要な場面で必ず想起される。伝統とはそうした性格を持つ。先に現在の活水学院の４つの個性を指摘した。これらはいずれも活水学院の伝統と密接な関係がある。

伝統の第１は，「キリスト教精神による全人教育」である。この特色の底流には，活水学院の伝統が息づいている。

第２は専門性の重視であり，少数の学生をていねいに指導し育て上げることにあった。これは長崎の町にたてられた活水学院に当初から求められた「本物の教育」という伝統につながる。

第３は女性の重視であり，これは第３代校長ホワイトが打ち出した教育方針

30) 活水学院百年史編集委員会，前掲書，224 頁

にも認められた活水女学校の伝統である。

第４は社会における少数者，弱い立場にある者への配慮である。これは初代校長ラッセルがとりわけ打ち込み，活水の校風となっていた伝統である。

このように，現在の活水学院の個性はいずれも伝統と密接な関わりがある。

(3) 流れる生命

ところで，なぜ伝統は継承され学院の個性を育てるのか。

その秘密は活水学院という共同体において精神性が継承されていくプロセスにある。その過程において重要な真実が生じている。それは大切な事柄が継承されていく時に，そこに生命が宿り，精神性が引き継がれていく真実である。

活水学院の卒業式で行われる「魂ゆずりの手桶」という行事がある。これは教育現場において代々生命が継承されてきた事実を象徴的に語っている。

活水学院の底流には，変わることなく生命が流れ続けている。生命が流れているから，活水学院は昔も今も人を育て養うことができるのである。

魂ゆずりの手桶
『活水学院創立125周年記念写真集』より

(4) 育ちゆく活水生

生命は人を育て養う。そうであるならば，現在の活水学院はどのように人を育てているのか。卒業生のメッセージを聞いてみたい。

私は高校１年の時に台湾に１年間留学しており，帰国後は英語と中国語のスピーチコンテストや暗唱大会に参加し，ひとつひとつの定期考査に全力で取り組む努力をしました。他にも今の自分の英語力を測るため，英検やTOEICなどの試験を積極的に受けるようにしていました。……

３年生の春には米国カルフォルニア州モントレーに派遣され原爆に関する英語プレゼンテーションをする機会を与えられるなど，入学したばかりの頃には全く予想もしていなかった経験をたくさんすることが出来，高校在学中に自分は本当に成長することが出来たと実感しています。KM[31)]

受験には基礎が一番大切だと思います。応用も基礎が出来ていなければ解けるわけがないからです。その基礎を身につけることができるのがこの特別進学コースです。確かに，他のコースよりも授業数や課外数が多く大変なこともあります。しかし，授業＝受験勉強というカリキュラムになっているので，無駄なく過ごすことができます。

私は塾には通っていませんでしたが，授業を大切にし，３年間このコースで勉強してきた結果，無事熊本大学に合格することができました。勉強はやって損はありません。……。KF[32)]

私は，現在プロのオペラ歌手になるために二期会オペラ研修所に在籍しています。

活水高校では充実したカリキュラムで音楽を学ぶことができます。音楽の基礎となる楽典，ソルフェージュはレベル別のクラスで丁寧に教えてくださ

31) 活水高等学校『わたし輝く』3 頁
32) 活水高等学校，前掲書，5 頁

り，そのおかげで大学ではレベルの高いクラスで学ぶことができ充実した学習ができました。……高校の３年間では舞台に立つ機会も多く与えて頂き，ステージでのマナーや心構えも学ぶことができました。

同じ志を持つ仲間たちと切磋琢磨し学んだ３年間は，私の音楽の土台となりました。……AO[33)]

私は活水高校で３年間バレーボール部に所属していました。「良い選手である前に良い生徒であれ」。これは活水バレーボール部の決まりです。毎日の練習や長期休暇には合宿もあり，きつい時もありましたが，私は常にこの言葉が胸に残っていたので勉強と部活動の両立に励むことができたと思います。……

この２つは習慣づけると自分の糧にもなり，とても役に立つので，ぜひ後輩の皆さんも心がけてみてください。EK[34)]

卒業生のメッセージは，活水高校には「様々な高校生活の過ごし方がある」と語っている。たとえば，「語学の研修」（KM），「受験勉強の基礎」（KF），「大学で通用する音楽の学習」（AO），「勉強と部活動の両立：よい選手である前によい生徒であれ」（EK）などである。このように多様な高校生活を送りながらも，彼女たちの声はそれぞれにとって充実した学びの場であったことを教えている。

そのように豊かな可能性を持つ活水高校が，人間性を養う教育の場であったことにも卒業生は気づいている。「本当に成長することが出来た」（KM），「私の音楽の土台となりました」（AO），「この２つは習慣づけると自分の糧にもなり，とても役立つ」（EK）と記している通りである。

---

33) 活水高等学校，前掲書，7 頁
34) 活水高等学校，前掲書，9 頁

おわりに

1934年４月に行われた活水女学校の入学式で，ホワイト校長は入学生に語りかけられた。

活水女学校には宝が隠されています。それを探し出してください。

ホワイト校長のメッセージに触発され，本稿は活水学院の宝を探す旅でもあった。この旅が明らかにした真実，それは活水学院の宝は活水の学びの場で生命の水によって育てられていく生徒と学生の一人ひとりだということである。

その上で紹介しておきたいスケッチがある。

帰宅途中の佐々木花子さん（1969年10月）

当時男子校であった同志社香里中学校・高等学校で学んだ。高校２年生の1969年10月の夕方だった。学校からの帰り道を急いでいた私は，後姿に疲れを感じさせる女性を追い越そうとした。その瞬間，女性と目が合った。彼女は佐々木花子さんで，同志社香里の広い校舎を一人で掃除している方だった。視線が合うと，花子さんは「アンタ！」と声をかけてこられた。

花子さん　アンタ，広い校舎を毎日一人で掃除して回るのはしんどいで。それに悪い生徒もおるしな。それでも，なんでしんどい仕事を続けているか，アンタ分かるか？

塩野和夫　……？

花子さん　それはなあ，この学校からエライ人が出てきてほしいと思うからや。そやから，毎日頑張って掃除して回っているんや。

塩野和夫　おばちゃん，ありがとう。おばちゃんが掃除してくれている校舎で勉強できて，僕ら幸せや。

花子さん　おおきに，そんなに言ってもらったら，うれしいわ。（ギデオンの新約聖書をハンドバックから取り出し）アンタ，これ貰ってくれへんか。

塩野和夫　ありがとう。でも僕も学校で聖書を勉強してるから，持ってる。おばちゃんの聖書，大事にしてや。

花子さん　そうか。アンタ，頑張ってや！

それは６年間，同志社香里中学校・高等学校でお世話になった佐々木花子さんとのたった一度，５分間ほどの会話だった。しかしあの時，花子さんの真実に深く触れていた。それ以来，花子さんに清掃されている校舎が尊く思えた。

イエスは言われた。

あなた方は地の塩である。あなた方は世の光である。

（マタイ５章13－14節）

この言葉はそのまま活水学院で生徒と学生を育てておられる教職員に用いることができると私は考える。

活水学院で生徒と学生を育てているあなた方教職員は，彼らに対して地の塩・世の光である。

教職員の働きが豊かに祝福されて，生徒と学生が育ちゆく活水学院であることを祈っている。

資　料

資料１　「年表　キリシタン・潜伏キリシタン時代の長崎」

	長　　崎	日　　本
1549		• ザビエルが鹿児島に上陸する。
1562		• 大村純忠が横瀬浦港を開く。
1570	• 純忠が長崎港を開く。	
1580	• 純忠が長崎・茂木をイエズス会に寄進する。	
1582	• 天正遣欧使節が長崎を出発する。	
1584	• 有馬晴信が浦上をイエズス会に寄進する。	
1587		• 豊臣秀吉が九州を平定し，伴天連追放令を出す。
1588	• 秀吉が長崎・茂木・浦上を直轄地とする。	
1590	• 天正遣欧使節が長崎に帰着する。	
1597	• 秀吉が西坂でキリシタン26人を処刑する。	
1600		• 関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利する。
1603	• 長崎が天領となる。	
1612		• 幕府が天領に禁教令を出す。
1614		• 幕府が全国に禁教令を出す。
1616	• ヨーロッパ船の入港を平戸・長崎に限定する。	
1622	• キリシタン55名を西坂で処刑する。	
1634	• 出島の築造に着手する。	
1635	• 中国船の入港を長崎に限定する。	
1637		• 島原の乱がおこる（～38）
1639	• 通商をオランダ（平戸）と中国（長崎）に限定する。	
1641	• オランダ商館を平戸から出島に移す。	
1688	• 唐人屋敷が完成する。	
1823	• シーボルトが長崎に来る。	
1824	• シーボルトが鳴滝塾を開く。	
1825		• 異国船打払い令を布告する。
1853	• ロシア使節が長崎に来航し，開国を求める。	• ペリーが浦賀に来航し，開国を求める。
1854		• 和親条約（米・英・露・蘭）を結ぶ。
1854	• 出島のオランダ商館が領事館を兼ねる。	
1858		• 修好通商条約（米・蘭・露・英・仏）を結ぶ。
1859	• 出島のオランダ商館を閉鎖する。	• 横浜・長崎・函館を開港する。
1862	• 東山手に「イギリス人教会」が落成する。	
1865	• 大浦天主堂が落成する。 • 浦上の信徒が信仰を表明する。	

資料２　「年表　活水学院史（前半）― 創立より敗戦まで ―」

	活 水 学 院 史	日本のキリスト教会史
1879	• ラッセルが東山手一六番館に学校を開く。（生徒数１名）	• 学制を廃し，教育令が公布される。
1880	• 南山手町オルト邸に移転する。 • ギールが浪の平町に日曜学校を始める。 • 生徒数が９名になる。	• 教育令が改正される。
1881	• 生徒数が18名になる。 • 校名を「活水」と定める。	• 加伯利英和学校（鎮西学院）が開校する。
1882	• 東山手町新校舎に移転する。生徒数は43名になる。	• 戒厳令が定められる。
1884	• 螢雪会および励志会が創設される。	• 秩父事件が起こる。
1885	• ギールが福岡に赴く。	• 福岡英和女学校（福岡女学院）が開校する。
1886		• 帝国大学令が公布される。 • 師範学校令・小学校令・中学校令が公布される。
1887	• 初等科（３年）・中学科（３年）・高等科（２年）・神学科（４年）・音楽科（５年）を設置する。 • 活水女学校規則を制定する。	• 保安条例が公布，施行される。 • スチイル・アカデミー（東山学院）が開校する。
1888	• 神学科第１回卒業生５名を出す。	
1889	• ラッセルの休暇帰国で，アレンが校長代理となる。 • 高等科が初めての卒業生２名を出す。 • 活水女学校規則を改定し，美術科を置く。	• 大日本帝国憲法が発布される。 • 関西学院が開校する。
1890	• ラッセルが帰任する。	•「教育ニ関スル勅語」が発布される。 • 第１回帝国議会が召集される。
1891	• 学生による音楽会と作品展示会を催す。	• 内村鑑三不敬事件が起こる。 • 田中正造が足尾鉱毒問題の質問書を議会に提出する。
1892	• 活水同窓会が創設される。	•「宗教と教育との関係につき井上哲次郎氏の談話」が発表される。
1893	• 予備科（２年）と裁縫部（和裁・洋裁，６年）を置く。 • 熊本に活水女園を設ける。	• 内村鑑三が「文学博士井上哲次郎君に呈する公開状」を発表する。
1894		• 日清戦争が始まる。（～1895）
1895	• 新校舎（カウエン館）が落成する。 • 幼稚園（３年）を設置する。	• 日清講和条約に調印する。
1896	• 機関紙『活水女学』を創刊する。	
1897	• 活水女園援助の音楽リサイタルを始める。	• 足尾銅山鉱毒被害民請願運動を開始する。
1898	• ヤングが第２代校長に就任する。 • 活水女園を福岡県の古賀村に移転する。	
1899	• 新式体操による演習会を講堂で催す。	• 文部省訓令第12号が発令される。 • 私立学校令が公布される。

資料２　つ　づ　き

	活水学院史	日本のキリスト教会史
1901		• 田中正造が足尾鉱毒問題で天皇に直訴する。 • 植村正久と海老名弾正のキリスト論論争が始まる。
1902	• 新式体操の演技会を舞鶴座で催す。	
1903		• 内村鑑三が「戦争廃止論」を発表する。
1904	• 活水愛国婦人会を組織する。	• 日露戦争が始まる。（～1905）
1905	• 幼稚園保母養成科を設置する。	• 日露講和条約に調印する。
1906	• 活水女園が大村に移転する。 • 活水女学校付属の玉乃江幼稚園を長崎キリスト教青年会（YMCA）内に設置する。	
1907	• 活水女学校にキリスト教女子青年会（YWCA）を設立する。 • 小学部（３年）を加設する。	• メソジスト三派が合同し，日本メソジスト教会を設立する。
1910		• 基督教教育同盟会を設立する。 • 大逆事件の検挙が始まる。 • 韓国併合に関する日韓条約に調印する。
1911	• 中等科と高等科を合併し大学部に組織変更する。別に専門部を置く。 • 初等科を高等女学部に改組し，小学部を６年とする。 • ヤングの休暇帰米で，ラッセルが校長代理に就任する。	• 植村正久が大石誠之助遺族慰安会を行う。 • 徳富蘆花が第一高等学校で「謀反論」を演説する。
1912		• 明治天皇が崩御する。 • 憲法擁護大会を開く。
1914	• 旧梅香崎女学校の校舎を寄宿舎に，スタウト旧宅を音楽教室にあてる。 • ヤングが帰任し，校長に再任される。	• 第１次世界大戦が始まる。（～1919） • 日本はドイツに宣戦布告する。
1915	• 校友会を創設する。 • 運動奨励を目的に「予樟会」が誕生する。	• 大正天皇が即位する。
1916	• 小学部を中止する。 • 校友会機関誌『校友会誌』を創刊する。	• 吉野作造が「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表する。
1917		• ソビエト政府が樹立される。
1918	• 活水の校章を制定する。活水バザーが始まる。	
1919	• 大学部を改組し，活水女子専門学校（人文科・英文科）を設立する。技芸部刺繍科・専門部美術科を廃止する。	• バルトが『ロマ書』を発表する。
1920	• ホワイトが第３代校長に就任する。 • 活水女子専門学校人文科を廃止する。	• 国際連盟が設立される。 • 日本基督教会同盟が朝鮮問題・青島問題・軍国主義・国際連盟について宣言を発表する。 • 日本最初のメーデーが行われる。

資料２　つ　づ　き

	活 水 学 院 史	日本のキリスト教会史
1921		• 大本教幹部が検挙される。
1922		• ワシントン会議で海軍軍縮制限条約に調印する。 • 全国水平社が創立される。
1923	• 神学科は横浜聖経女学校に合併される。 • ホワイトの休暇帰米で，ペカムが校長代理に就任する。 • 校歌を募集し，制定する。	• 関東大震災が発生し，自警団による朝鮮人虐殺が起こる。
1924	• 校友会が音楽会とバザーを催す。	• 朝鮮人及び中国人虐殺懺悔祈祷会を開く。
1925	• ホワイトが帰任し，校長に復帰する。	• 治安維持法と普通選挙法が公布される。
1926	• 新校舎と新寄宿舎に移転する。	• 大正天皇が崩御する。
1927	• 校友会を活水同窓会と改称する。	• 金融恐慌が始まる。
1928	• 活水女学校保護者会が設立される。	• 日本基督教連盟が「社会信条」を制定する。
1929	• 創立50周年記念式典を挙行し，『活水50年史』を刊行する。	• 共産党員が検挙される。 • 世界大恐慌が始まる。
1930		• 基督教各派が「神社問題に関する進言」を行う。
1931		• 満州事変が始まる。日本基督教連盟が満州事変に関する声明書を発表する。
1932		• 靖国神社参拝拒否により上智大学配属教練教官が引き揚げる。
1933	• 米国メソジスト婦人外国伝道協会（WFNS）が東山手町の校地を活水女学校に寄贈する。	• 日本が国際連盟を脱退する。 • 灯台社幹部が不敬罪で検挙される。
1934	• 大村女園は敷地を活水女学財団法人に寄贈する。	
1935	• 高等女学部が制服を決める。	
1936		• 二．二六事件が起こる。
1937	• 御真影を拝受する。	• 日中戦争が始まる。
1940	• 岡部珪蔵が第４代校長に就任する。 • 活水防護団が設置される。	• 第２次世界大戦が始まる。
1941	• 予樟会を解散し，報国隊が結成される。 • アメリカ人教師が帰国する。	• 太平洋戦争が始まる。 • 日本基督教団が設立総会を開く。
1942	• 武藤健が第５代校長に就任する。	
1943	• 高女部学徒勤労報国隊が出勤する。 • 女専部報国隊が緊急動員される。	
1944	• 女子専門学校英文科を文科に改め，専門部は女子専門学校音楽科・家政科となる。	
1945	• 長崎に原子爆弾が投下され，職員６名生徒35名が死亡する。	• ポツダム宣言受託を決定し，天皇が戦争終結の詔勅を放送する。

資料３　「キリスト教学校の設立（1874－89年，４教派）」

日本聖公会系学校
1874　立教学校（立教学院）
1875　照暗女学校（平安女学院）
1877　立教女学校（立教女学院）　東京三一神学校（聖公会神学院）
1879　永生女学校（プール女学院）
1884　英語塾（桃山学院）　大阪三一神学校（聖公会神学院）
1888　香蘭女学校

日本基督教会系学校
1875　フェリス・セミナリー（フェリス女学院）
1876　原女学校（廃校）　新栄女学校（女子学院）　桜井女学校（女子学院）
1877　東京一致神学校（明治学院）
1884　ウイルミナ女学校（大阪女学院）
1885　金沢女学校（北陸学院）　頌栄女学校（頌栄女子学院）
1886　仙台神学校（東北学院）　宮城女学校（宮城学院）
1887　大阪一致女学校（大阪女学院）　スミス女学校（北星学園）
　　スタージス・セミナリー（梅光女学院）　スチール・アカデミー（明治学院）
1889　女学専門希望館（金城学院）

日本組合基督教会系学校
1875　神戸ホーム（神戸女学院）　同志社英学校（同志社）
1877　同志社分校女紅場（同志社）
1878　梅花女学校（梅花学園）
1880　神戸女子伝道学校（聖和大学）
1886　松山女学校（松山東雲学園）　宮城女学校（廃校）　山陽英和女学校（山陽学園）
1887　熊本英語学会（廃校）　北越学館（廃校）　熊本女学校（順心学園）

日本メソジスト教会系学校
1874　海岸女学校（青山学院）
1878　耕教学舎（青山学院）
1879　美会神学校（青山学院）　活水女学校（活水学院）
1880　ブリテン女学校（成美学園）
1881　加伯利英和学校（鎮西学院）
1882　遺愛女学校（遺愛学院）
1884　東洋英和学校（廃校）　東洋英和女学校（東洋英和女学院）
1885　英和女学校（福岡女学院）
1886　来徳女学校（弘前学院）　広島女学会（広島女学院）
1887　愛知英語学校（名古屋学院）　静岡英和女学校（静岡英和女学院）
1888　神戸婦人伝道学校（聖和学院）　名古屋清流女学校（廃校）
1889　関西学院　山梨英和女学校（山梨英和学院）

「学校の設立」（塩野和夫『日本キリスト教史を読む』51-53頁）より

資料４　「生徒，学生在籍者数調査表」

年度	活水女学校	計
明治12	1	1
13	9	9
14	18	18
15	43	43
16	60	60
17	96	96
18	107	107
19	97	97
20	130	130
21	175	175
22	190	190
23	176	176
24	134	134
25	146	146
26	158	158
27	154	154
28	187	187
29	195	195
30	226	226
31	259	259
32	217	217
33	232	232
34	140	140
35	176	176
36	210	210
37	270	270
38	344	344
39	414	414
40	432	432
41	422	422
42	170	170
43	334	334
44	300	300
45	300	300
大正２	227	227
3	213	213
4	253	253
5	253	253

資料４　つ　づ　き

年度	活水女学校			計
大正６	249			249
7	251			251
8	222			222
年度	**高女部**	**専門部**	**専門学校**	**計**
大正９	263		19	282
10	243	86	32	361
11	288	47	51	386
12	368		59	427
13	408		78	486
14	356	48	89	493
15	354	44	110	508
昭和２	329	55	117	501
3	320	54	117	491
4	312	55	93	460
5	324	50	89	463
6	351	62	81	494
7	388	48	95	531
8	399	58	75	532
9	420	58	63	541
10	444	66	64	574
11	449	71	55	575
12	466	73	53	592
13	472	75	55	602
14	467	83	64	614
15	467	84	67	618
16	521	102	74	697
17	586	108	73	767
18	673	158	56	887
	高女	**専門学校**		**計**
19	722	301		1023
20	730	330		1060
21	784	387		1171
	中学	**高女４，５年**	**専門学校**	**計**
22	635	259	360	1254
	中学	**高校**	**専門学校**	**計**
23	615	325	346	1286
24	578	322	246	1146

資料４　つ　づ　き

年度	中学	高校	短大	計
昭和25	486	447	140	1073
26	401	454	242	1097
27	387	471	408	1266
28	391	470	450	1311
29	420	471	445	1336
30	453	504	435	1392
31	481	502	443	1426
32	488	514	440	1442
33	498	490	483	1471
34	489	526	523	1538
35	490	550	550	1590
36	549	546	544	1639
37	599	517	550	1666
38	704	597	649	1950
39	669	761	732	2162
40	610	733	736	2079
41	437	985	728	2150
42	344	1039	751	2134
43	246	1066	800	2112
44	196	1068	820	2084
45	155	1017	838	2010
46	157	1001	860	2018
47	169	1039	854	2062
48	177	1072	871	2120
49	158	1132	971	2261
50	170	1138	1115	2423
51	184	1107	1206	2497
52	231	1025	1271	2527
53	225	1020	1337	2582
54	216	1043	1352	2611

「生徒・学生在籍者数調査表」（活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』「附録卒業生の思い出」102頁）より

資料５　「年表　活水学院史（後半）― 敗戦より現在 ― 」

	活水学院史	西南学院史
1945	• 女子専門学校文科を外国語学科に改め，家政科を保健科・被服科とする。	
1947	• 新学制による活水中学校を開設する。	• 新学制による西南学院中学校を開設する。 • 日本国憲法が施行される。
1948	• 新学制による活水高等女学校を開設する。	• 国連が世界人権宣言を採択する。 • 新学制による西南学院高等学校を開設する。
1949	• 中高『活水新聞』を創刊する。	• 新学制による大学学芸学部（神学・英文学・商学の３専攻）を開設する。
1950	• 新学制による女子短期大学（英文科・家政科・音楽科）を開設する。	• 朝鮮戦争が始まる。(～1953) • 短期大学部を発足，舞鶴幼稚園・早緑子供の園が西南学院の組織に入る。
1951	• 活水女学財団法人を学校法人活水学院に改組する。 • 中高校舎を竹の久保町（現在の宝来町）に移転する。	• 財団法人西南学院を学校法人西南学院に改組する。 • 対日平和条約・日米安全保障条約に調印する。
1954	• 創立75周年記念式典を挙行し，『活水75年の歩み』を刊行する。	• 文商学部を文学部（神学科・英文学科）と商学部（商学科）に分離する。
1956		• 日本が国際連合に加盟する。
1957		• 諫早大水害が起こる。
1958		• 学術研究所を発足する。
1960		• 『西南スポーツ』を創刊する。 • 安保反対で３日間，ストライキが行われる。
1961	• 短大学寮（樟蔭寮）を新築する。	
1964		• 授業料値上げ反対で，全学ストライキが実施される。 • 東海道新幹線が開通し，東京オリンピックを開催する。
1967	• 短大家政科を「家政・食物」専攻に，音楽科を「器楽・声楽」専攻に分離する。	• 法学部法律学科を開設する。 • 『西南学院大学広報』を創刊する。
1968		• 全闘委が大学全館をバリケード封鎖する。
1969	• 短大家政科家政専攻に３選択（被服・食物・家庭経営）を新設する。	• 外国語学科を「英語・フランス語」専攻に分離する。 • 中核派が沖縄奪還闘争で１号館を封鎖する。
1970		• 電子計算機センターを開設し，公開講座を開講する。 • 商学専攻科に経営学専攻を開設する。 • 国連寄託図書館を開館する。
1971		• 法学研究科法律学専攻修士課程を開設する。 • 国際交流制度を発足する。 • 国際反戦デーの火炎瓶闘争に対し，機動隊を導入する。

資料５　つ　づ　き

	活水学院史	西南学院史
1972		• 経営学研究科経営学専攻修士課程を開設する。 • 沖縄が返還される。 • 日中共同声明が発表される。
1973	• 短大学寮（若草寮）を新築する。	• 留学生別科を開設する。
1974	• 短大新校舎（１号館）を新築する。	• 文学部に児童教育学科を開設する。 • 法律学専攻博士課程・経営学専攻博士課程を開設する。
1976	• 短大体育館を新築する。	• 文学部に国際文化学科を開設する。
1977	• 短大に日本文学科を新設する。 • 短大本館を増改築する。	
1979	• 高校に音楽コースを新設する。 • 創立百周年記念式典を開催する。	• 合宿研修所を開設する。
1980		• 文学研究科博士課程を開設する。
1981	• ラッセル記念館・音楽館・２号館を新築する。 • 大学を開設する。 • 中高新校舎を新築する。 • 国際交流センターを開設する。	• 経済学研究科経済学専攻修士課程を開設する。
1982		• 長崎大水害が発生する。
1984	• 大学英文学科が春期海外語学研修会を開始する。 • 中高寄宿舎「わかぎ寮」を新築する。 • 中学の第１回サマーキャンプを行う。 • 第100回蛍雪会を行う。	
1985	• 就職科を新設する。 • 短大英文科夏期海外語学研修会を開始する。 • 第１回音楽科定期演奏会を行う。	• 児童教育学科に小学校教諭免許課程を新設する。 • 博物館学芸員課程を開設する。
1986		• 国際文化学部を開設する。
1987	• 梅光寮（新戸町キャンパス）を新築する。 •『活水同窓会の歩み』を刊行する。	
1988		• 経済学科を「経済学・国際経済学」専攻に分離する。 • 神学科に「神学・キリスト教人文学」コースを開設する。
1989	• 国際交流課を新設する。	• ベルリンの壁が撤去される。
1990		• 本島等長崎市長に対する銃撃事件が起こる。 • 湾岸戦争が始まる。（～1991）

資料５　つ　づ　き

	活水学院史	西南学院史
1991	• 大学院（文学研究科英文学専攻修士課程）を開設する。 • 短大家政科を生活学科（生活専攻・食物栄養専攻）に改称する。 • 第１回国際交流懇談会を実施する。 • 上海外国語大学と教育・学術交流に関する協定に調印する。	• ４年間の必須科目であったキリスト教学を第１年次・第２年次必須に変更する。 • 雲仙普賢岳で大火砕流が発生する。
1992	• 短大生活学科が第１回海外生活研修を行う。 • 活水同窓会が創設100周年記念大会を開く。	
1993	• 活水国際人教養講座を開催する。	• キリスト教資料展示室を開室する。
1994	• 音楽学部を開設する。 • 音楽学部棟（新戸町キャンパス）を新築する。	• 公開講座を開設する。 • 高校が男女共学に移行する。
1995	• 被爆50周年追悼記念式を挙行する。	• 阪神・淡路大震災が発生する。 • オウム真理教が地下鉄サリン事件を起こす。
1996	• 日本文学科，日本語教員養成副専攻課程を新設する。 • 第１回活水市民大学を開講する。	• 中学校が男女共学に移行する。
1997		• 文学研究科国際文化専攻修士課程を開設する。
1998	• 文学部人間関係学科・専攻科植物栄養専攻を開設する。 • 第１回高校生平和大使に活水生が参加する。	
2000	• 文学部日本文学科が現代日本文化学科に，音楽学部が演奏学科・応用音楽学科になる。大学文学部英文科が英語学科に，短大英文科は英語科に名称変更する。	• 文学研究科国際文化専攻博士課程を増設する。 • 文学部社会福祉学科を新設する。 • アメリカで同時多発テロが発生する。
2002	• 健康生活学部校舎（新戸町キャンパス）を新築する。 • 健康生活学部食生活健康学科を新設する。	
2003	• 高校に英語科を新設する。	• 中学と高校が百道浜校地に移転する。
2004	• 健康生活学部に生活デザイン学科・子ども学科を開設する。	• 法科大学院を開設する。 • 新潟県中越地震が発生する。
2005		• 経済学部に国際経済学科を新設する。 • 大学院神学研究科・人間科学研究科を新設する。
2006		• 大学院国際文化研究科を新設する。 • 大学博物館を開館する。
2007		• 西南コミュニティセンターを開館する。 • 西南子どもプラザを開設する。

資料５　つ　づ　き

	活水学院史	西南学院史
2009	• 大学看護学部看護学科を新設する。 • 大村キャンパス１号館を新築する。	
2010	• 音楽学部音楽学科を新設する。	• 西南小学校を開校する。
2011		• 東日本大震災が発生する。
2012		• 大学ボランティアセンターを開設する。
2015	• 活水中学校，活水高校（英語科・特別進学コース・音楽コース・総合進学コース），活水女子大学文学部（英語学科・現代日本文化学科・人間関係学科）・音楽学部音楽学科（演奏表現教育コース・音楽文化コース・ポピュラー音楽コース）健康生活学部（食生活健康学科・生活デザイン学科・子ども学科）看護学部（看護学科），大学院文学研究科（英文学専攻修士課程）	